令和４年度「高等学校段階の病気療養中等の生徒に対するICTを活用した遠隔教育の調査研究事業　成果報告書（概要版）

京都市教育委員会

１．背景・目的

京都市内の病院に入院した高校生に対しては、在籍校からの支援を基本としながら、京都市立桃陽総合支援学校（病弱特別支援学校として設置されており、京都大学付属病院等の病院内に分教室を設置。）からの支援を行っている。本事業においては、同校に配置された「医教連携コーディネーター」による支援を中心として、医療機関・在籍校・保護者等との連携体制の構築を図りながら、病弱教育やICT機器活用の観点から相談・支援を実施している。

２．事業の内容及び成果

令和４年度の桃陽総合支援学校による高校生支援・教育相談に関する実績は、以下のとおり。
（支援事例数：計１３件）
〇分教室設置病院（小児科）に入院する高校生への支援：７件
〇分教室設置病院（小児科以外）に入院する高校生への支援：２件
〇分教室設置病院以外の病院に入院する高校生への支援：４件

具体的な取組内容及び成果は以下の（１）～（４）のとおりである。

（１）遠隔教育を実施するために有効な関係機関の連携体制の構築に向けた取組

・桃陽総合支援学校のセンター的機能の活用や医教連携コーディネーターのコーディネートにより、京都府立高等学校や他府県の高等学校と医療機関との円滑な連携を進めることができている。これまでは主に小児がん拠点病院である京都大学医学部附属病院、京都府立医科大学附属病院との連携体制を構築してきたが、今年度は小児がん拠点病院ではない病院においても、対象生徒の主治医と高等学校をつないだカンファレンスを実施することができた。
・対象生徒の主治医と高等学校をつないだカンファレンスの実施は、病状や治療計画に基づいた学習支援ができたり、同時双方向型の配信授業についての校内連携が進んだりと、高等学校からその有効性について報告を受けている。カンファレンスを通じて構築された連携体制のもとで、同時双方向型の配信授業を受け、学校や友人とつながりを保ちながら学習継続ができることや出席認定がなされること等により、復学後の不安を解消できる点で、入院する高校生の心理的安定にもつながった。
・高校生支援の取組内容や相談先、同時双方向型の配信授業の進め方等を具体的に示したリーフレット「長期入院療養中の高校生の学習継続に関するガイドブック」を作成し、京都府下の高等学校・特別支援学校や医療機関、全都道府県・政令指定都市教育委員会等へ配布を行った。また、桃陽総合支援学校のホームページにおいても掲載している。
・医教連携コーディネーターが、大学からの依頼を受けて、将来、医療・教育の現場に携わる教職課程専攻学生や医学生、看護学生に対して医教連携や病弱教育に関する講義を行った。

（２）遠隔教育における学習状況の確認方法及び評価についての検証

・実技においては、昨年度と引き続き授業見学やレポート提出を中心に学習状況の確認・評価を行った。また、放課後の事例ではあるが、同時双方向型の配信により遠隔で実技の個別指導を行った。また、提出物については、郵送やクラウドを使用することによって、学習状況の把握を行った。
・定期考査については、同時双方向型の配信授業と同じ方法で在籍校と病室をつなぎ、病室では担当看護師付き添いのもと、生徒本人の手元をタブレットで映し、クラスの時間割に沿って同日の同時間に、クラスのテスト監督の指示で実施した。在宅での受検の場合は、高校教員が訪問し実施した。この方法により円滑に定期考査を実施することができた。

（３）通信環境及び授業配信機材

・GIGAスクール構想を踏まえて各校の通信環境は飛躍的に向上したが、音声や画質などの通信環境を補助するため、高等学校・病院ともに桃陽総合支援学校からモバイルルーターを貸し出し、同時双方向型の配信授業を行うケースが多かった。配信場所や受信場所による通信の遅延や切断などの通信トラブルは学習意欲の低下に直結するため、引き続き通信環境の改善について検討が必要である。

・タブレット端末とテレプレゼンスロボットkubiの使用により、板書の見たいところを見ることや、先生の呼掛けに振り向くことなどができ、また、クラスメイトがkubiに話しかける様子もあり、生徒が学級を身近に感じることができた。また、音声については、教員が無線型のマイクをタブレットで繋いで使用することで、クリアな音声で配信することができた。

・テレプレゼンスロボット用アプリ「Telepotalk」によりアバターを使用することで、入院中の容姿を気にせずに授業に参加できたうえ、通信量の軽減により通信が安定したという報告があった。

（４）心理的支援につながる配信授業内容の検証

・同時双方向型の配信授業について、高等学校及び生徒に対し聴き取りを行ったところ、実施した全ての高等学校が「必要である」と回答した。「同時双方向型の配信授業がないと学習保障ができない」という学習面に関する意見のほか、「学校とのつながりが、疎外感から解放されるために有効だった」など生徒の心理的支援につながったとする意見が多く見られた。同時双方向型授業により、学習保障だけでなく、学校行事やクラスメイトとのやりとりなどを通して、学校や学級とつながり続けることができている。この結果、生徒の進級や進学の不安を取り除き、治療や復学へのモチベーションを支えることができている。

・従前より取り組んできた大学生ボランティアによる「高校生学習会」については、ピアカウンセリングとしての効果も期待して「オンライン学習会」を昨年度に引き続き実施した。学習会に参加した高校生からは、「心が和んだ」「気分転換になった」という声もあり、学習面の支援だけでなく、入院する高校生の心理的支援にもつながった。また、今年度は入院している高校生同士をつなぐ取組も実施した。本人の希望や心情など、慎重に検討をする必要はあるが、心理的な支援として有効であると感じられた。

３．今後の課題

・これまで、同時双方向型の配信授業に必要な機材の配置・調整やそれらの活用の専門性を含めて桃陽総合支援学校に蓄積されたノウハウにより、ICT機器活用の充実化を進めてきた。ただ、機材に関しては、桃陽総合支援学校や病院側のサポートがなければ同時双方向型の配信授業を始められないという点を課題に挙げている高等学校も見られ、機材やネットワークの整備については、引き続き課題である。

・実技科目の評価に関する課題については、コロナ禍で普及したClassiやTeamsといったそれぞれの学校で利用している学習支援システムを活用等により、徐々に解消されつつあるが、対面授業に比べて学習状況を把握しにくいということを課題に挙げている高等学校は依然多く、効果的な遠隔教育による実技科目の実施や評価方法について、高等学校と引き続き連携を図ることが必要である。

・連携体制の構築について、今年度は小児がん拠点病院以外の病院とのカンファレンスを実施することができ、また、取組内容や支援の進め方を示したリーフレットを作成・配布できたが、桃陽総合支援学校の分教室が設置されていない病院との連携が今後も引き続き課題である。入院する病院に関わらず、支援が必要な高校生に適切な支援ができるように、高等学校、病院への広報は今後も継続する必要がある。

本事業は、文部科学省の委託を受け、実施したものです。
報告書の詳細は、下記URLからご覧ください。
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/main/006/r01/1422837_00003.htm